

金融広報アドバイザーの紹介

子どものころから持たせたい 正しい金銭感覚

伊藤忠雄
(栃木県)

子どもたちからの手紙に 喜びを感じて

38年間、小学校や中学校で社会科を教えてきた伊藤忠雄さん。退職後1年を経て、2002年から金融広報アドバイザーになり今年で7年目を迎えます。

「教員時代は、金融という世界にはあまり縁がありませんでしたが、子どもたちに教えることや、かつての経験を地元で少しでも還元できればと、お引き受けいたしました」

そうした伊藤さんの教え方は、子どもたちにとつとにかく楽しく興味を持たせながら進めること。

「私の場合は、話術と使う資料に気を配っています。かつて学校で教えていたころは、一人一人の子どもたちの性格などをよく知っていましたから、ときにはフランクな言葉遣いもしました。しかし、金銭教育で接する子どもたちとは一期一会ですから、言葉遣いは慎重にしています。また、資料類についてはなるべく身近なもの、最新なものなどを使

うよう心掛けています。新聞に折り込まれたチラシや、自宅に郵送されてきた勧誘や不正請求のものが、類なども教材にします。そのほか、現在流通しているお金や古銭など

もいい教材になります。もちろん、新聞やテレビで報道された関連する話題などがあれば、それをテーマにして話を進めることもあります」

こうした努力もあり、授業を行った学校の子どもたちからは、「お話がよく分かりました」「これからは教えていただいたことを生かして、お金を大切にしたいと思います」といった内容の手紙を、もらうこともあるそうです。

「ええ、そうなんです。子どもたちの金銭に対する大切な心の芽生えを感じますね。活動していきよかつた、本当に実感できるときです」

毎月開催する自主学習会

毎月開催する自主学習会

現在、栃木県金融広報委員会から委嘱されている金融広報アドバイザーは8名。数年前までは、この人

数で年に30回ほどの金融広報活動を行っていましたが、現在では100回を超えています。これは栃木県金融広報委員会の積極的な指導と広報活動によるところが大

きいですが、もう一つ金融広報アドバイザーによる自主学習会も見逃すことができません。

「金融広報アドバイザーと言えども、専門分野はそれぞれ違います。ファイナシヤルプランナーの方もいれば、私の

ような元教員もいます。活動する上で共通化できるものはするし、できないことなどは補完し合おうというのが自主学習会の目的で、毎月1回、テーマを変えていろいろ勉強しています。例えば、市

が主催する消費生活展は、年度始めの自主学習会でテーマと活動内容を十分に話し合います。その上で、市との説明会にアドバイザーが出向



き、十分な打ち合わせをします。学校で行う金銭教育も同じで、各アド

バイザーは事前に必ず、学校側と綿密な打ち合わせをしています」

また、タイミング等の条件が合えば、ときにはほかの金融広報アドバイザーの講座を傍聴することもあ

るそうです。栃木県内で、主に子どもたちを対象に金銭・金融教育活動続ける伊藤さん。子どもたちの金銭感覚が正しく育っていくように、日々の活動に邁進しています。

金融広報アドバイザーとは、金融広報委員会からの委嘱を受け、各地において暮らしに身近な金融経済等に関する勉強会の講師を務めたり、生活設計や金融・金銭教育の指導等を行う金融広報活動の第一線指導者です。現在、全国に約480名います。

家計簿記帳・生活設計で 50年に迫る支援活動

山田恭子

(島根県)

相手の立場に立った助言が基本

出雲市、および雲南市周辺を本拠地に、生活設計のプロとして長い間活動されている山田恭子さん。金融広報アドバイザーになったのは1991年10月。当時は、まだ貯蓄生活設計推進員と呼ばれていた時代です。

「それまでは、県の職員として生活改善関係の家庭管理専門技術員をやっていました。そのころ、『わが家の家計簿体験談・貯蓄作文』*というコンクールの審査員を委嘱されていまして、それが縁でしょうか、貯蓄生活設計推進員になり現在に至っています。もう17年目ですから、本当に長いですね」

県の職員時代には、家計簿記帳運動に取り組み、その活動の中から地域リーダーを育てるなど、この分野では数々の実績と、忘れ得ぬ思い出があるそうです。

「そうですね、高度経済成長期で、本当に皆さんも頑張ってくれました。家計簿の記帳も結構細かく教えて

いた時代で、費目ごとに、これはこうだから、こうしなければならぬなんて……。でも、昔のお母さん方は、時代のせいでしょうか、教えられた通りにやるので、ある意味では偉かったと思います」

こうした背景もあり、山田さんの金融広報アドバイザーとしての活動も、生活設計というテーマが中心となっています。

「これまでの経験を生かすということで、生活設計を中心にやってきましたが、学習グループに対しては、さまざまなアドバイスが必要になります。例えば、個人年金や公的年金が社会的な話題になれば、そうした視点からアドバイスも必要になってきます。経験だけではカバーできないことがあるので、普

段から情報の収集も必要ですし、常に自己研鑽は続けなければなりません。でも、一方的に助言するのは駄目ですね。相手の立場に立つということが、やはりとても大切だと思います」

総決算は地元で開催する 年10回シリーズの金融学習会

今、山田さんは、これまでの活動の総決算として、金融学習グループの一つ（JAの女性部会員20名で構成）を対象に、10回シリーズの学習会を行っています。

「これまで、主にお母さんたちを

対象に活動してきましたが、そろそろ身をひきたいと考えています。そこで、これまでの総決算として、今年の2月から10回シリーズで学習会を始めました。参加されている皆さんの平均年齢は多分50代になると思いますが、老後設計を中心にいろいろとお話をしています。最後に、こうした仕事ができることを本当にうれしく思います」

また、山田さんはこれまでの長い活動経験から、子どもに対する金銭教育の必要性も痛感。この夏休みには、子どもたちを中心とした日銀松江支店の見学会を企画しました。

参加したのは子ども17人、親6人、それに小学校の教頭先生と金融学習グループの13人が加わった総勢38人。

「学校教育の中で、金銭教育を定着させるのは、なかなか難しいと思います。こうした機会を作ることでも、お役に立てればと思っています」



*「わが家の家計簿体験談・貯蓄作文」金融広報中央委員会と都道府県金融広報委員会の共催による作文コンクール。2015年と2016年をもちいて名称変更後、平成15年をもちいて終了